



我身

WAGAMI

第 4 号

2020年 6 月 1 日

題字：常如版の御文

「場の創造」

教区教化委員会教化本部長

梨谷真嗣

私たち宗門は「人の誕生」と「場の創造」という願いのもとに歩みを進めてきました。この言葉は、昔からよく聞き慣れた言葉ですが、自分にとってあまり

インパクトのある響きを感じられなかったことから特に重要視してきませんでした。しかし、教区の教化活動に関わらせていただくうちにこの二つの言葉こそが教化活動の原点であり具体的な活動内容を表していると思うようになりました。

まず「人の誕生」とは言うまでもなく念仏者の誕生なのでしょう。私が特に注目したのは「場の創造」という言葉です。「場の創造」とは私たちが阿弥陀仏の教えを聞く場のことです。なぜこの言葉が気になったかと言うと、教区の教化活動に参加させていただいていつも教化委員会のメンバーと話をしている内容は教化事業において「人が何人きた」「多かった」「少なかった」ということばかりです。このことは教区の教化活動ばかりでなく、組の活動であったり、お寺の報恩講や祠堂経等の仏事にも感じられることだと思えます。時には参加人数が少なくて心が折れる時もあり、そのことから教化事業の目的が人を多く集めることだけになってしまいい、本来の目的が見失われてしまったのではないのでしょうか。「場の創造」の目的とは「人の誕生」です。「人の誕生」

の具体的な行動が「場の創造」ということなのです。

私たちには、念仏者という人を誕生させることはできません。あくまでも人を誕生させるのは阿弥陀仏のお仕事なのです。その阿弥陀仏のお手伝いとして、阿弥陀仏の代官として私たちはそれぞれのお寺で、組で、教区で場を作り続けるしかないのです。目に見えない「人の誕生」という阿弥陀仏のお仕事が行われる場を私たちが具体的に創造していくということ、このことに尽きるのではないのでしょうか。

昔亡くなった父親が「報恩講は内陣のお荘厳と門徒さんへの案内が終われば坊さんの仕事は終わりや」と言っていた事が思い出されます。場を整えは「人の誕生」は阿弥陀さんにお任せということでしょう。

場の創造は企画や運営をする人だけの仕事ではありません。その場に参加しようとする人はその場の情報を他者に伝え勧めていく、そのことが場を広げていくことであり、場の創造になっていくのです。

また、時間的な制約やいろいろな理由で教化の場に参加できない人もおられます。そのような人のためにも、文章を通して参加していただけるこの「我身」という場が誕生しました。「我身」という教化の場でじっくりと教えに向かいあっていただければ幸いに思います。

高岡教区教化委員会 公開研修会

二〇一九年四月四日 於 高岡教務所

第二回

人間にとって宗教とは何か

講師 京都教区玄照寺住職 瓜生 崇氏

私たちは漫然と今の真宗寺院は宗教法人であり、僧侶と門徒は宗教者であることを自認しています。でも私たちは宗教的なのか？そして人間的なのか？世間には様々な宗教を標榜する団体が百花繚乱していますが、彼らはほんとうに宗教的なのか？そして人間的なのか？

高岡教区では三回にわたって瓜生先生の講座を開き、新宗教の内実と教義について学びました。参加者は多くなかったものの、新鮮で熱気あふれる集いでした。

今回はこれまでの成果をふまえ、人間が宗教を求めるとはどういうことなのか、という根本課題にアプローチしたいと思います。(開催趣旨より抜粋)

このような開催趣旨のもと、瓜生崇氏にお話しいただきました。今回は前号(『我身』第三号)の第一回に引き続き、第二回の講義全文を掲載いたします。

お 話

■本物の宗教と偽物の宗教

皆さんこんにちは。今日はようこそお集まりいただきました、ありがとうございます。先程ご紹介いただきました瓜生です。今回は五回目になります。一応これで最後だと聞いていますが、今までの総まとめをやってほしいと依頼されました。

さつき、控え室に来られた方に、今度自分のお寺で話してほしいと言われて、何をお話ししたらいいですかと聞いたたら、「真の宗教とそうではない宗教との違い」を話すことはできないかと言われたのですよね。昔そのことが気になって恩師に尋ねたことがあります。私の先生は大峯頭という方でした。もう亡くなられましたけど、日本の宗教学・宗教哲学の第一人者です。先生の最晩年、八十過ぎてから知り合っただけで、かわいがっていただきました。その大峯先生に、本物の宗教と偽物の宗教の違いはどこにあるのでしょうかと聞いたのです。どういう答えが返ってくるかと思ったら、「自分も昔気になっ



【講師プロフィール】

1974年生まれ。
電気通信大学在学中の1993年に浄土真宗親鸞会に入会。1998年より同会の専従の講師として布教やインターネット対策にかかわり、2005年に脱会。その後は自身の体験を元に講演活動や大学でのカルト対策、脱退者へのサポートを通じて問題に関わってきた。
真宗大谷派玄照寺住職(滋賀県東近江市)。日本脱カルト協会理事。猫好き。

て考えたことがあるけれども、どうも結論がでなくて考えるのを止めてしまった」と言っておられました。

「本当の宗教」と「偽物の宗教」という境界線が、はたしてあるのだろうかということは、自分にとって重い課題になっています。私は浄土真宗親鸞会という教団を辞めて真宗大谷派に入ってきました。親鸞会には十二年いましたが、十二年間いて辞めたということは、やはりどこかで親鸞会が偽物だと思ったのでしょうか。大谷派に入ってからまだ辞めていないということは、まだここは真だと思っているわけです。その根拠がどこにあるのか。そもそも、そういう根拠が

どこかに存在するのか、宗教とはいったい何なのか。申し訳ありませんけれども、これは自分の中でまだ結論が出ていません。わからないとしか言いようがないです。
大峯先生もそのことを随分考えただけでも、わからなかったと言われました。先生は私よりもずっと深く考えられたでしょうけれども。今、大峯先生に「今度人間に

とつて宗教とは何かという話をしなければならぬのですが、どう話したらいいですか」と聞いたら、どうお答えになるかなと思いつながらこちらにきました。

■無上心

『観無量寿経疏』(善導大師)の最初のところに、私たちが「勸衆偈」(『真宗聖典』一四六頁)と呼ぶ偈文がありますが、最初は「道俗時衆等」と呼びかけから始まります。その後、「各發無上心」と続いていきます。道俗時衆等といいますが、道というのは坊さんのことで、

俗というのは坊さんではない方、俗人です。そして、時衆というのはその時々集まられた人という意味ですから、道俗時衆というのは「皆さん」ということになります。最初に「皆さん」と呼びかけているわけです。その後各發無上心と続きます。

そして善導大師は、こう呼びかけられるのです。おのおの「無上心」を發しなさいと。無上の心といいますが、いろいろな解釈があるのでしょうか、私はこれは真実を求める心だと思っております。真実を求める心、正しさを求める心、宗教心と言ってもいいかもしれません。真実を求める心を發しなさいと。無上の心を發しなさい、菩提心を發しなさいと。

その後、こう続くのです。「生死甚難厭、佛法復難欣」。「生死」を厭うこと甚だ難く、佛法を欣うこともまた難しと。真実を求める心とはいったい何か、本当のことを求める心とは何だろうか。それは生死を厭うことだと書かれています。生死というのは、私が生まれて死ぬことです。私はただこの世に生を受けて、ただ生きて、ただ死んでいく、それだけの存在ではないのだと。何かその人生には、深い真実がある



のだと。こういうものを求める心を、無上心と言われたのではないかと思うのです。

■有限の命を何かと引き換えて生きていく

私はただ生まれてただ死んでいくだけなのか、ある時にこんなことがあったのです。妻が夜中まで韓国ドラマを観ていました。私は、横ですつと確定申告の仕事をしていました。忙しく仕事をしているのに、ずっと韓国ドラマを観ているものですから、彼女に嫌味っぽく言ったわけです。「お前は仏法はちつとも聞かんくせに、韓ドラを観る時だけは命懸けだな」と。そうすると、私の妻はこう言い返しました。「ドラマ観るのに命懸けなんかないわ。あんたと暮らすストレスから観ざるを得んのや」と。

これ、いったい何が言いたいかといったら、ドラマを観るのに命懸けという人はなかなかいないと思うのです。でもよくよく考えてみたら、ドラマを観るのには時間がかかる。朝ドラなら百何十回やるわけですから、トータルでいただいた二日間くらいの時間を費やすでしょう。いのちは生まれて死ぬまでの時間ですから、かけが

えのない二日間の命を差し出してドラマを観ているのです。ここで皆さんが、お話を聞くのもそうでしょう。今日は二時間半の予定ですけど、二時間半の命を差し出して話を聞いているのでしよう。何をするのに、全部自分の命を差し出してやっている。私の生死とはそういうことでしょう。

何年生きられるかはわかりません。今の平均寿命だったら、八十年くらい生きる人が一番多いのかもしれませんが、自分がどれだけ生きられるかはわからない。ただ一つだけいえるのは、命は有限だということです。無限では絶対になり。有限の命を、何かに交換して生きざるを得ない私の姿があるわけです。

私の父は男は仕事か命だと言っていました。なぜ仕事か命なのかといったら、実際に命を差し出して仕事をしているからです。私の母は子どもが命だと言っていました。これも実際に命を差し出して子どもを育てているからです。そうやって私たちは、限りある取り返しのつかない私の命を、いろんなものと交換して生きるわけです。そうやって生きざるを得ないという私の姿があるわけです。

それは子どもであったりとか、仕事であったりとか。皆さんだったらどうでしょう。お寺の方だったら、お寺という人が多いかもしれない。友達とか自分の信念とか政治とか、全部交換です。私の命と交換して生きるのです。そうやって私はいろんなものを命と交換して、回りに引っ付けて生きるのだけど、私のその命が切れた時に、この回りのものも全部私から離れていくのです。これが「空過」ということ。これが本物だと、間違いないと、懸命にかき集めていったものが最後は空しく過ぎていくということです。だから、私はどんなに懸命に生きていても、どこか自分の人生というものに空しさが残る。私が大事に思っているものは、いつか大事なものではなくなくなってしまふことを知っているからです。空しく過ぎる。

■空しさと孤独

実は、前に高岡に来させてもらってから今日までの間に、一つ大きな事件がありました。個

人的なことなのですが、妻が癌にかかったのです。マンモグラフィで影が見つかったのです。その後精密検査で乳癌が見つかりました。検査結果は家族同伴で聞きに来てくださいとあったのでついて行ったのですが、結果を医師から聞いた時に、妻の顔が真っ青になっていました。よくわかります。私の妻はものすごく強い人で、普段一緒に暮らしていても一つも逆らえないし、口ごたえもできない。ところが、癌ですという話を聞いた時に真っ青になって、「どうしよう、どうしよう」と言つて、私が死んだら子どものために誰かと再婚してくれとか、いきなり言い始めるわけです。完全に気が動転しているのです。いやいや、ステージⅠだから治ると医師から聞いて、手術をして、そして放射線治療をして、今はホルモン療法をやっているのですが、まだ何年か続きます。

私たちは知っています。大切に間違いないと思っているものが、たった一言「癌です」と言われただけで、すべてが色あせて自分のものではないような感覚になってしまふ。こういう時が必ずくることを知っているのです。知っているのだけど、失われるものをあてにして

頼りにして、生きざるを得ない私があるわけでしょう。

それでも自分の命を意味のあるものにしたくて、一生懸命に交換を続けるのです。朝晩ずっと寝転がって、何もしないでグターッと生きていくのが幸せかと思ったら、やはりそうは思えないわけです。やはり何かを成し遂げて、実りある人生だったとか、いい人生だったとか、意のある人生だったとか。つまり、ただ生まれて死ぬだけではなかったのだと言いたいのです。ところがそうやって、ただ生まれて死ぬだけではなかったのだと思つて、私が求めて得てきたものは、私の人生が終わる時にすべて私から離れていって、私を満たすものではなくなくなってしまうのです。

そういうことを私たちはすべて知っている。自分はずっと一人で生まれて、いろんなものを身につけて、最後は全部失つて、たった一人で死んでいくのだと。「獨生獨死」(『真宗聖典』五九頁)であります。独りで生まれて、独りで生きて、独りで死んで、独りで去っていくのだと。だから、どんなふうにも一生懸命この人生を生きていても、空しさと孤独がなくならない。

和田先生という方が宗教心というのは苦悩する心だとおっしゃったことがあります。これはよくわかります。私の実感としては、宗教心は空しくて、孤独な心です。どんなふう生きて、どうこの人生を歩んでも、なくならない空しさ、孤独なのです。これはいったい何だろう、この心と心というのはどこからくるのだろう、この心と心というのはいったい何ものなのだろうと。そして、その空しさと孤独の源を求めていく心が、無上心だと思うのです。

■宗教的信念の特徴

私が今まで会ったいろんなカルトの信者も、やはりみんなそうだったので。孤独に震えていました。みんな孤独を感じています。私は独りだと。生きづらいと。自分の気持ちをわかってくれる人がいない、自分の思いをわかってくれる人がいないと。このまま生きて、このまま死んでいいのだろうか。自分の人生というものを、本当に活かして輝きを与えてくれる真実が、どこかにないだろうか。そういう方をいっぱい見てきました。

以前に話したかもしれないませんが、最初に相談を受けた「アレフ（オウム真理教^{しんりきょう}）」の信者さんが、アレフに入ったきっかけは、ボランティア活動だったのです。人を救っていくことが一番大事なことなのだと思う、懸命にやっていたのです。ところがある時に気づくのです。どんなに一生懸命にボランティアをやっても、人を救おうとして求めて頑張っても、それが本当に人を救えるのかどうか、最後まで自分からわかないと。

これは私たちにもよくある話です。人を助けようと思って何かしてあげたとしても、本当にそれが人を助けることになるのかどうか、私たちは最後までわかりません。本当に救いたい、本当に助けたいと悩むのだけど、救済願望をもって人を助けていこうとしても、本当のところはどうしていいのかわからないことに気づくのです。このわからないというのは、究極的には、私がこの人生をどんなふう生きて、どうこの人生を求めて生きていったならば、私そのものが救われるかもわからないということです。だから、彼女は自分が救われたいと思ったのです。私自身が、本当に救われることがあるの

だろうかと探し求めたのです。探し求めてもわからないから、悩みすぎて悶々としていた。そうしたら心配して声を掛けた人がいて、そんなに悩んでいるのだったら、一緒にヨガでもやってみないかと誘われて、ヨガのサークルに入ります。その入ったヨガのサークルがアレフ、オウム真理教だったのです。その中に入って、むちゃくちゃそこで心身の調子が良くなったのです。今まで心も苦しいし体も苦しいと悩んでいたのだけど、ヨガをやることで心身共に調子が良くなっていった。そんな中で、麻原彰晃^{あさはらしやうこう}の教えを聞いて、ああ、私が求める真実はここにあったのだと気づくのです。

いろいろな話をしたけど、最終的に彼女が何と言ったかという、「瓜生先生、もう私の邪魔をしないでください。あなたならわかるはず。私はやっと、自分を生かしてくれる真実の教えに遇^あったのです。今まで悩んで迷うことしかない人生だと思っていたが、やっと真実に向かつて歩むことができたのです。みんなはわからないかもしれないけれども、私は今本当に幸せなのです」と。邪魔しないでくださいというのが、私が彼女から聞いた最後の言葉でした。今はも

う出家して連絡が取れません。

そういう人を見て、皆さんはどう思われますか。かわいそうだと思いますか。どう捉えたらいいのでしょうか。親御さんはもう慌てふためいて大変でした。最近その親御さんが、出家した娘さんに会いに道場に行ったのです。一回だけ会わせてくれたそうです。その道場の人たちは本当に親切で明るくて活き活きとしていて、そして自分の娘もとても充実しているように見えた。その姿を見た時に、今までは帰ってこいばかり思っていたけど、もうしばらく見守ってあげようという気持ちになったそうです。

この間、アレフから分派した、上祐史浩じょうゆうしこうさんがやっている「ひかりの輪」という教団——彼らは自分たちのことを宗教ではないと言っていますが——が、我々は麻原彰晃を崇拜する宗教



団体ではない、だから私たちに對する觀察処分を止めてくれ、と主張して裁判を起こしました。オウム新法というものがあまして、ひかりの輪にしてもアレフにしても、三百六十五日監視されていて、いつでも立ち入り検査ができるようになっていきます。その対象から外してほしいというのです。

結果として彼らは裁判に負けたのですけれども、何人かの専門家が意見書を出していて、私にも法務省から依頼が来ました。私はいただいた資料を元に調べて意見書を出しました。具体的にはひかりの輪の活動や教義が麻原彰晃の影響下にあるのかなのかという論点で、私は「ある」と判断したのですが、そのためにオウムの教義、アレフの教義を随分研究したのです。麻原の説教も四十時間分くらい聞きました。それで、こんなことははっきりとは言いにくいのですが、オウムは教義的にはなかなかすごいなと思えてしまったのです。

もう死刑になった新実智光にいみともみつという人をご存知ですか。あの人の裁判で弁護した弁護士の講演をこの前聞きに行ったのです。新実智光という人がどういう人だったかを一生懸命語ってくれ

て、その中で非常に印象に残ったのは、「この人は、最後の最後まで自説を曲げなかった人だ」と。他の死刑囚の多くは、自分がやったことは悪かったと反省したのですが、彼はそれをしなかったのです。地下鉄でサリンを撒いたことは悪であったかといったら、それは悪であったと言っていない。では亡くなった方とご遺族に対して君はどう思うかと聞くと、彼は「わからないかもしれないけれども、あの時に地下鉄でサリンを撒くことで、あの人たちは救われたのだ」と。最後まで曲げなかった。本来であれば「三悪道まくだう」に落ちて苦しむはずであった人たちだけども、それが「ポア」されて、少なくとも人間界か天上界に近いようなところまで行けるとができたのだと新実さんはずっと言い続けました。だから自分の行いは間違いではない、自分が指示して準備して実行に移したことは間違いではない、死んだ彼らを結果的に救ったのですと。最後までそれを変えないままで、死刑執行されました。

これを聞いて皆さんどう思われますか。遺族の方々にとってはとんでもないことです。遺族の方は当然、ものすごく反発されました。私

だってそんなことされたら非常に嫌です。嫌な気持ちがありますけれども、サリンを撒くことで、ポアされて、三悪道に落ちるはずだった人たちが救われたのだ、ということは否定できませんか。違うと言えますか。そうだと違うとも言えないでしょう。反証できません。これは違うのではないか、ということ証拠によって示すことはできません。我々の倫理観や思いと違うということとは言えます。また、一般的な仏教の教義理解とは違うということも言えます。ところが、ポアされた方々が本当に救われていないのか、それに関しては、救われていないと断定はできないのです。

教科書に載っていますが、ピサの斜塔から、ガリレオ・ガリレイが大小二つの玉を落とした。当時見ていた人たちは、大きくて重い方が先に下に着いて、小さい方は後になって着くと思っていた。結果は一緒に着いた。重い玉と軽い玉と、同時に離れたならば一緒に着いた。大きくて重いものの方が先に着く、という思い込みが、実験によって反証されたわけです。そうではないということがわかった。しかし宗教にはこれがないのです。亡くなられた方の次に生ま

れられる世界に行ってみて、三悪道に落ちるはずだったからポアされて良かった、ということを誰も確かめられません。死んだ後の世界があるかどうかもわかりません。反証できない、これが宗教的信念の特徴です。あの人たちは救われたか救われていないか。サリンを撒くことによって結果的に多くの人を助けることができたのだ、という新実智光さんの主張を私たちは反証することができないのです。

アレフに入った女の子が、「私は本当に真実に遇って、今は本当に幸せで充実しています、ようやく私の求めるものに遇った」と言った時に、「それは騙されてマインドコントロールされて、本当でないものを信じ込まされているだけなのだ」と、はたして言えるか。私は言いましたけれども、本心では、最も深いところでその断言はできないのかもしれない。大谷派の話だって、阿弥陀様の話だって、なんだってそういうのです。反証できないのです。何が真実で、何が真実ではないのかわからない。「本物と偽物の宗教、真の宗教とインチキな宗教はどこで見分けるのですか」と言われた時に、私たちは「お東のような伝統教団が正しい宗教で、オウ

ム真理教やアレフみたいなものはインチキだ」と言いたいし思いたいんだけど、本当は逆かもしれないのです。

しかし、反証できないにもかかわらず、私を含めてここにいる皆さんは、オウムはインチキで大谷派はそうではないと思っただけでしょう。これは結局、その時々自分の理性や常識と照らし合わせて、「これはきつと信じて大丈夫だ」と思っただけで信じているに過ぎないことになります。つまり、ここが大事なところなのですが、宗教なんて実は全く信じていないのです。信じているのは単なる自分の理性であり常識です。宗教によって救われようとしているのではなく、当てにならない自分の心を信じているだけです。

■ 無明性

これを無明性といいます。迷いでしかない自分の思いではなく、それを超えたものを求めようとして、何かを探し始めるのですが、これが真実だと思った瞬間に自分の思いの中に引き戻されてしまう。なぜなら、それが真実だと判断しているのは私の思いに他ならないからです。

つまり私は、何もかも知っているような顔をして生きていますけれども、本当は何も知らないということなんです。わかったふりをしてこの人生を生きているけれども、本当はその時々で周囲を見渡して、周りの人たちが間違いないと言っているものを、自分も間違いないと言っているだけでしよう。

よくこういう相談を受けるのです、「うちの息子がカルトに入った。なぜああいうところに入ったのか、なぜあんなところで毎日修行しているんだ、なぜあんなバカみたいなことをやっているんだ。この世の中に生きていけば、例えば美味しい物を食べたり、綺麗な景色を見たり、面白い映画を見たり、人々の温もりに触れたりとかして、それによって、楽しかったり嬉しかったり喜びを感じたりすることがあるじゃないか。なぜそういうところに喜びを感じないで、あんなインチキな教団に入ってその中で生きていくとしたんだ」と。そういうことを親御さんが入信した子に言うわけです。

ところが、美味しい物を食べて、明るく楽しく生きて、皆と友達になって、いろいろなことをしつかりとしながら地道にこの世の中を生き

て働いていけば、私の人生はこれで満足できるといっても、それもその通りになるかわかりはしないでしょう。お釈迦様は少なくともそれが本当だとは思えなくて出家されたのですから、そうやって生きていったら幸せになれるのか、この人生をちゃんとうなずいていけるのか、私の無明が破れるのか。それがわからなくて、宗教を求めたのでしょうか。だから、そういう親御さんの言葉をどれだけぶつけてもぴくりともしないのです。こんな教団に入ってほしくなかった、普通に会社に勤めて普通友達を作った普通に結婚して普通の家族を築いてほしかったと何度も聞きました。でも、このように求めた人は、みんなが正しいと言っていることが、本当かどうか実はわからないのだと気づいたのです。

私は昔、東京にある中央大学でずっとカルトの話をしていたことがあります。入学してきた何千人という新生入生にカルトの話をして、全員に二十五分間話して歩くのです。一つの教室で二百人ほど入れるのですが、五、六教室を回ります。本当に嫌になります。一緒に回っている人がいて、その人は薬物依存の怖さを話す先生だったのです。私はカルト依存の怖さを話す



挨拶
太田教化本部長

先生。カルト依存の怖さを話す私と、薬物依存の怖さを話す先生が一緒になつてずっと教室を回っていたのです。

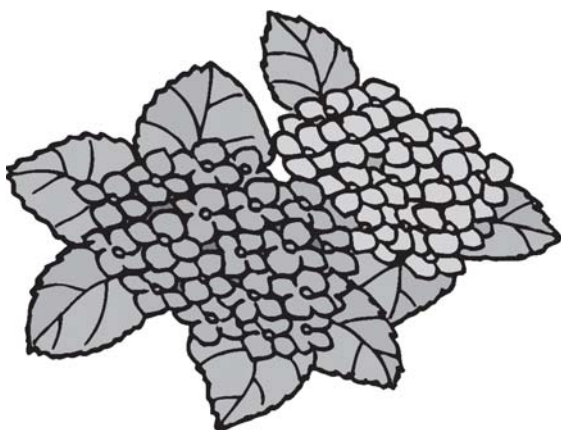
全部終わった後にお弁当が出たのです、これを食べて帰ってくださいと。事務室で弁当を食べていた時に、薬物依存の危険を話されていた先生が身の上話をされたのです。その先生がなぜそういう道に入ったかということ話をしてくれました。その時彼はこう言ったのです、「もともと自分は新聞記者で、世の中の矛盾をいっぱい見てきた。それで、本当のものは何なのかわからなくなつてすごく悩んだ」と。「ならばなぜこういう道に入られたのですか」と聞いたら、「薬物依存のことを取材する中で、薬物に依存せざるを得ない、薬物に依存してしまつたような圧倒的に弱い人を救つていく、助けていくというのは圧倒的に正しいことだと思えて、これだったら迷いなくできると思つてこの道に入った」と言つたのです。

ば、原発をなくした方が本当にいいかどうかというの、わからない。現時点では原発は明らかに駄目なだけで、原発をやめた方が本当に人類のためになるかは、わからないでしょう。例えば、安倍首相。支持率は高い方だけれども、私の周りの人で好きだという人はあまり見かけません。ところが、別の人が首相になつた方が良かったかといつたら、わからないでしょう。世の中のこととはものすごく複雑に絡み合つていて、こうすれば絶対よくなる、ああすれば絶対大丈夫とか、こうすれば絶対間違いない、ということは一つも無い。だから私は、常に迷わざるをえない。それが辛くてしんどいから、絶対的な正しさが欲しくなるのです。

原発が正しいか間違いかというのは、いずれそういうことが反証される日がくるかもしれない。福島での事故はその一つだったかもしれない。小泉純一郎こいずみじゅんいちろうさんは、自分は推進してはいたけれどもあれは間違いであつた、と言つていますから。しかし、宗教的な正しさは、反証できないですから。地下鉄でサリンを撒いたら人を助けることになるのかならないのか、ということは、我々の知恵では絶対にわかりません。

逆のことをいってしまったえば、絶対に反証ができないことだからこそ、宗教はある意味では安全地帯にいるのです。

この間大谷派で、経典とか蓮如さんの『御文ごぶん』とか、そういうところに女性差別があるかないかというパネル展をした時に、内局の人に一部を外せと言われたそうです。これはなぜ外さなければいけないのかというと、宗派として結論が出ていないからだそうです。代わりに展示されたパネルは、東京医科大学の女性の入学者を受験の時点で差別していたというもの。つまりは他人事です。ところが経典とか『御文』



が女性差別しているかどうかは、結論が出ていないから展示しては駄目だと。

つまり、差別はしてはならないという自分たちの日頃の主張と、経典や聖教との矛盾が明らかになると、宗教の絶対性を守らなければならないから、思考停止するのです。そこに突っ込んでいくことができない。私たちが信じているものはひょっとして間違っているのだろうか、という危険地帯には絶対に入れないのです。正しさを見つけ、正しさに依存した時に、その正しき自体を問うことをやめてしまう。宗教という安全地帯に閉じこもって、その結果宗教心を失うのです。

■つかんだ時に宗教心は失われる

宗教心というのは、厳密に定義できないかもしれませんが、和田稷先生の言葉でいうと、苦悩する心。私の思いでいうと、孤独で空しい心です。宗教心を持って、孤独で空しい心を抱えて、苦悩する気持ちを抱えて、何か絶対的に正しい、宗教的な信念とか教義とか、そういうものを求めていって、それをつかんだ時に、宗

教心を失ってしまうのです。

前回に少しお話ししたのですが、小学生の時、私は死ぬのが怖くて眠れませんでした。なぜ、人間は最後死んでいかなければならないのに、今を一生懸命生きねばならないのか。それが本当にわかりませんでした。なぜ私は生まれて、生きて、死んでいくのだろう。この生き難い世の中で、一生懸命努力して、辛い、苦しい思いをいっぱいして、そうやって私が生きなければならぬ理由はなぜかを、思い悩んで苦しんでいました。そして中学ではカトリックの学校に入りました。カトリックの学校では神父さんがいっぱいいて、火曜日の放課後に聖書の勉強会をしていると聞いて毎週行ったのです。その時に私はクリスチャンの先生に聞きました。「人間はなぜ生きていますか。なぜ最後、死んでいかなければならないのに、今を一生懸命生きなければならぬのですか」と。そうしたら、先生は、「死ぬのは怖くない。それは、虫が古い皮を脱ぎ捨てて、脱皮していくようなものなのだ。なぜ君が生きているのかといったら、人のために生きるのだ」と。ああそうだな、と聞いた時の私は思いました。やはりキリスト教の学校

に入ってよかったな、これが本当なのだ。高校生くらいまで熱心に聖書を読みました。今は読んだことをほとんど忘れてしまいましたから、あれはやはりただ読むだけではだめなのでしょうね。

最近研修会の講師に呼ばれて、カトリックの教会が多いことで有名な長崎に行きました。研修会の翌日、ふらっと街にある教会に入って、そこで神父さんといろいろ話をして、本を一冊買ったのです。どちらかというと買わされたようなのですが、『キリスト教とは何か』（ペトロ・ネメシエギ）という本です。その本を電車の中で読んでいたら、いろいろ懐かしく思い返されてきて、涙が出てきました。そうやって、キリスト教に救いを求めていった時期が私にはあったのです。

でもね、真実に遇った、これは間違いないのだ、私は神の国に生まれるために生きているのだ、皆を助けるために生きていくのだと。そういう思いをつかんでしまった人たちの集団に行くくと、みんな力強くて迷いがありません。本当にこの教えは正しいのだろうか、自分は救われるのだろうかという疑問を持つ人はそこには誰

もない。みんな力強くて、そして真っ直ぐで真実に向かってしっかりと歩んでいますよ。でも、そういう時に宗教心はなくなるのです。俺は間違いない方向を向いていると思った時に宗教心はなくなるのです。

私は中学校の時に人のために生きるのが人間の目的だと言われて、最初はそうだと思ったのだけれども、途中から違うのではないかと思うようになりました。高校の時にも随分と悩んだのだけれども、なぜか高校生活は楽しかったし、ちょうど大学受験が始まりましたから、とりあえず受験勉強をやっている時はそういう悩みに向き合わなくて済んだのです。しかし結局はあまり行きたくない大学に行くことになって、その時にまたこの問いに悩むようになったのです。

その時に、「人生の目的を知りたくないか」と声をかけられたのが親鸞会との出遇いだったのです。その時のお話はこんな話だったのです。アルベール・カミュという人がいますね、『異邦人』を書いている人です。その人が書いている『シーシュポスの神話』という岩波文庫の本があります。この中に最初に何が説かれている

かというところ、「真に重大な哲学上の問題は一つしかない。自殺ということだ。人生が生きるに値するか否かを判断する、これが哲学の根本問題に答えることなのである」とあるのです。自殺というのは、生きる意味を見出せなかったということでしょう。私は知らないうちにこの世に生まれて、そして知らないうちにこの人生を懸命に生きていくわけだけど、その人生に本当に生きる意味があるのかなのか、このことが哲学の一番の根本の問題だと。そのことをあきらかにするのが哲学だと。

そしてその後この話が出てくる。ここに神に背いた男がいて、大きな岩を丘の上に持ち上げるが、持ち上げた岩はすぐ落ちてくる。落ちた岩を一生懸命また持ち上げる、持ち上げた岩がまた落ちてくる。何度も何度も繰り返し岩を持ち上げる男の話なのです。これが私の姿だと。間違いないだろうと思って苦労して求めてきたものが、ガラガラと崩れていって、次はこれだと思って持ち上げたらまた崩れて。ずっとそれを繰り返し続けていくのだと。これが人生だ。

だからここで神は私たちに問うているのです。

これは間違いないと思ってそうじゃなかったと。そして別のものを求めても、やはりそうじゃないと知らされ、このために生きてこのために死んでいけるというものを見つけないことができず、延々と探し続けて最後に死んでいく私の人生に、本当に意味があるかと問うているのです。

実はこの『シーシュポスの神話』は、最後に妙な終わり方をします。「神々のプロレタリアートであるシーシュポスは、無力でも反抗するシーシュポスは、自分の悲惨なあり方を隅々まで知っている。まさにこの無残なあり方を、かれは下山の間考えているのだ。かれを苦しめたに違いない明徹な視力が、同時に、かれの勝利を完璧なものたらしめる。侮蔑によって乗り越えられぬ運命はないのである」と。わかったようでわかりません。これはカミュも自分で書いていてあまりに絶望的だったので、どうにかして人生に希望を見出したいと思って無理やり書いたような気もするのです。つまり、私たちは無理矢理にでも何かの理屈をつけて、自分の人生に意味があることにしたいのです。私はそれを聞いて驚いて、自分だけがこんなことを悩んでいたのだと思ったら、ここにこん



なにかくさん悩んでいた人がいたのだと思って、あつという間に惹かれていきました。その時に私に話をしてくれた人は東京大学のインド哲学専攻の院生だったのです。今はとある大学で仏教学の先生をされています。その人が私に一生懸命になって、哲学の話とか仏教の話とかを教えてくれるのです。それで私は今まで疑問に思ってた、悩んで、迷って、苦しんでいたものが溶けていく思いがしました。やっと自分が真実に出遇えて、この道を進んでいけることになったのだと思いました。

親鸞会の教義はここで三回目の講義でお話させていただきましたけど、一生懸命に仏法を聴聞して、最終的に信心決定しんじんけつじようすることが親鸞会の教義上の救済です。これは回心体験えしんともいったりもしますが、間違いない救済体験に私が辿りつくことができるのだということです。私もそこを目指して仏法を聞いて求めています。最近荷物を整理していた時に、親鸞会時代の真宗聖典が出てきたのです。法蔵館から出ている、柏原祐義かしわばらゆうぎさんが編纂された聖典です。昔は大谷派もこれを使っていたそうですね。それを開いたら背のところの紐がボロボロになって、何

回もテープを貼った跡がありまして、あちこちに書き込みがあり、線が引いてあって、とにかくあのころ随分聖典を読んだのだなと思いました。

大学一年生の四月八日に親鸞会で仏教を聞き始めて、五月の半ばくらいに電車で富山の親鸞会の本部会館に行ったのですが、お金がなかったの、当時は急行能登号という夜行列車で行ったのです。その夜行急行の中で、朝まで先輩が『愚禿鈔ぐとくしやう』の話をしてくれたのを覚えています。『愚禿鈔』に二双四重にそうしじゆうの教判きやうはんというところがあるでしょう。親鸞聖人が例えば天台の教えとか法華の教えとか、いろんな大乘仏教の流れの中で、浄土真宗はどういう位置づけにあるのかを表しているところなんです。そこを五、六時間休みなしでずっと話してくれたのです。とにかく電車に乗ってもバスに乗っても、どこに行っても仏教の話しかなかったのです。それが私のいた親鸞会だったのです。特に私がいた関東の学生部はそういう傾向が強かったです。そしてここに真実がある、ここに真実が説かれていると。信心決定して間違いない身になるのだと。これが私の人生の目的なのだ。そ

の希望に必死にしがみついていたのです。怖いのは、それにしがみついている時は、宗教心から遠ざかっているのです。宗教とは不思議です、宗教をつかむと真実を求める心は消えてしまうのです。宗教から離れると真実を求める心がまた出てくるのです。宗教が宗教心を殺すのです。

■おのおの無上心をおこせども

親鸞会を辞めた後にまたこの心が出てきました。本当のところは何なのだと思います、いろいろな人のお説教を聞き回りました。「浄土真宗の

教えというものはこうなのだ」と断言してくれる話が聞きたかった。つまり納得しなかったのです。そして私は信心をいただきましたから、信心をいただくにはどうしたらいいのか、信心をいただいたらどうなるのですかと。いろんな先生に聞き回りました。

それで、浄土真宗本願寺派のある先生のところに行きました。その人は「阿弥陀さんありがたいですね、阿弥陀さんに遇えてよかったですね」と安心満足な話をしておられたのです。そして私は控え室に行きまして「先生は今、安

心満足なのですか」と聞いたら「もう救われて安心満足だ」と。「死ぬ怖さとかないのですか」と聞くと、「死ぬのはそら怖いけど、でも行くところがはっきりしとるから安心や」と。「ああそうなのですね、僕はそういう境地にはなれません」と言つて、そこで一番聞きたかったことを聞いたのです。「本当に阿弥陀さんに救われたら自分がはっきりするものですか、阿弥陀さんに救われたら救われたことがわかるのですか」と。そうしたら「そりゃ凡夫にはわからん」と言われたのです。

そこで「凡夫にはわからんと言つても、さっき先生は私は阿弥陀さまに救われた安心やと言いましたよね。それは凡夫にわかったというのとじゃないんですか」と聞きました。そうしたら「えーっと……聞いたとつたら自然にこうなるんや」と言われました。「はっきりするもんじやないんですか」ははっきりするもんじやないけど、自然にこうなるんや、じわじわとなるんや」と言われて送り出されました。今もその先生とは親しくさせていただいています。でも結局はそれだと「聞いたとつたらじわじわとちゃんと救われていく」ことをつかんで納得して、救われ

た証としますのでよね。凡夫にはわからんと言いながら、わからうとしてわかったことにしているわけです。

他にも「他力本願とは何ですか」とある方に聞いたら「本願というのはいね、今の私を生かしたるものだ。今心臓がドキドキ鳴っているだろう。自分で心臓をドキドキさせているのか？」と言われて「それは違います」と言うと「自分でさせとるんじゃないけど、心臓ドキドキしてるだろう。君をそうやって生かしている、そのはたらきが本願だ、それがいのちだ。大きなのちに生かされているんだ」「はあ、わかりました。大きなのちに生かされているんですね」と。それは本願ではなく自律神経のはたらきだろうと思いましたが、ややこしいことになりそうなので言いませんでした。

大きなのちに生かされている、それが親鸞聖人の教えなのだと言つて、全部頭の中でこねくり回して、自分が生きることがこういう意義のあることなのだ、自分が求めていくことはこういうことなのだと言つて、自分が求めていくことは、くのです。そしてこの不安や苦しさを空しさから解放されようとするのです。

考えてみれば、仏教を聞いていなくても人は似たようなことをやっているのです。そうでしょう。自分が生きる意味というのは家族をちゃんと養うこととか、人に迷惑をかけずに世の中の役に立って精一杯生きることとか、一日一日を楽しんで満足して過ごすこととか、みんな何かしらの納得できる人生の理由付けを求めているのです。そしてシーシュポスの神話で描かれるような、存在の無意味さから逃げようとするわけです。これが私の姿ではないですか。仏教を聞かなかったら一番大事なことを考えていないとか法話で聞いたことがあるけど、実は仏教を聞いても聞かなくてもやっているのは似たようなことなのです。この私の思いを満たして、



そして存在の不安を忘れさせてくれる正しさを求めて、つかんだ真実に依存して生きるわけです。それが親鸞聖人の言葉であったり、ガンジーの言葉であったり、どこかで聞きかじってきた人生哲学であったり。そこが違うだけです。ところが親鸞聖人は善導大師の言葉をこう読むのです。さつき私が言った善導大師は「おのおの無上心を発しなさい」と書いています。ところが親鸞聖人は「おのおの無上心を発せども」と読む。善導大師は真実を求める心を発しなさいと言ったのですが、親鸞聖人は真実を求める心を発せども、と読んだのです。真実を求める心を発した：けれども、という意味です。つまり、みなさんは真実を求めてこられましたでしょう、と親鸞聖人は言うのです。真実を求めて生きてきたけれども、

生死甚だ厭いがたく、
仏法また欣いがたし。

〔真宗聖典〕一四六頁

つまり真実を求めて真実を探して生きてきたでしょう。しかし、迷いを超えることができなかつたではないですか。頭の中でこしらえて納得した理屈で、これが私の人生だ、これが生きる意味だと思つたものは、次から次へとめまぐるしく変わっていったでしょう。つかんだと思つたら消えていったでしょう。この不安な心や空しさを見ると、私は本当に大事なことは何一つ知らないのだと。本当はそうだとわかつていながら、そうではないと言い続けて、その空虚な無明にいろんなものをくつつけてごまかして生きてきたでしょう。こう言われるのです。

本当に私が遇わなければならぬものは、これが真実だということではなくて、何が正しいのかを一つもわからず、何が善で何が悪かもわからず、かけらの真実もない私がここにあるということではないか。私が遇うべきなのは、かりその真実ではなくて、どうやっても正しく生きられない、ずっと迷つてしか生きられない、救われない、この無明の私でしょう。結局私の変わらない真実って、それしかない。

浄土真宗であきらかにされた我が身の真実は一つしかないのです。それは、私には真実はま

るでないということ。親鸞聖人は、

浄土真宗に帰すれども

眞実の心はありがたし

虚仮不実のわが身に

清浄の心もさらになし

（『真宗聖典』五〇八頁）

とおっしゃっている。浄土真宗を聞いてきて、如来に遇って眞実の教えに遇って浄土の風を受けて、いのちのはたらきを感じて、いろんな表現で聞いてきましたよ、如来の救いを。でも皆さんどうですか、いのちのはたらきなんか感じられましたか、浄土の風は感じられましたか、気休めではなかったですか、どうですか、求めてきて。

■私が私自身を呼ぶ声

私はわからなかったです、正直なところ。求めてもわかりませんでした。最近長崎の浄土宗

のお寺で話した時に、「その宗教が眞実かどうかは、どこでわかるのですか？」という質問を受けて、「それは私が救われるかどうかです」とその時は答えたのです。「あーそうか」と言っ

て質問した方は納得していました。ところが実はその先を聞かれたら困ったのです。その先とは「じゃあ私が救われることが、どうやってわかるのですか」という質問です。それを問われたら私は返す言葉がありません。

私が救われたことがハッキリわかる。阿弥陀さんのことが疑いなく信じられる。そういう人間になりたいと思ったこともあったのです。ところがわからない。私が浄土に往生して仏になるということが「今の一念に定まる」と親鸞聖人はおっしゃったでしょう。定まったということがわかりますか。わからない、わからないのです。そういう気持ちになったことはある、でも後から振り返ってみたらやはりその気持ちも長続きはしません。妄念妄想ですよ。

小池 龍之介さんという方をご存知ですか。

本屋さんの仏教書コーナーに行くとき小池さんの本がいっぱい置いてありますよ。あの方は去年あたりに、これから最後の仕上げをして必ず



「解脱」して戻ってくると言って家出していったのです。たぶん自分は大丈夫だ、救われたという気持ちになったのでしょう。最後の仕上げということは、その最後のところがやはり確信が持てなかったのかもしれない。放浪生活に出て瞑想修行して解脱して戻ってくると言ったのです。

それが最近戻って来られました。七年間以内に解脱とおっしゃっていましたが、三カ月くらいで戻ってこられました。そして、自分が解脱できると思っていたのは、魔境まきょうでしたと言われていました。勘違いだったというのです。

私たちも仏法を聞いていたらそうなるのです。懸命に聞法して、私はもう大丈夫だと思ったりするのです。坊さんなんて特にそういう顔をして話をしているのではないですか。私は救われたという顔で法話をしているのです。私もお寺で法話をする時はそうなっています。阿弥陀様は必ず救ってくださるのです。今に浄土往生が定まるのですとか、阿弥陀様は決して見捨てませんなどと言っているわけです。それで自分が酔って相手も酔わせているのです。せっかく夢から覚める教えを聞いてい

るのに、みんなと一緒に夢を覚ます夢を見ていただけなのです。これは妄念妄想ですね。

「邪見憍慢悪衆生」という言葉が「正信偈」しやけんきょうまんあくしゆじゆう（『真宗聖典』二〇四頁）にあります。「邪見」とは真実を知らない私です。真実を知らない私は仏法を聴聞して真実を求めますが、そうしたら邪見が「正見」になるのかといったら、なりはしません、「憍慢」になるのです。仏法を聞いたら正見になるのではなく、憍慢になるのです。「邪見憍慢悪衆生」とはそういう意味でしょう。俺は真実を知らされた、真実に気づいた、真実を求めた、真実をつかんだという人間ができてくるのです。そしてそうではない人間を区別して見下し始める。あの人はまだ世間の論理で生きているのだとか、あの坊さんは親鸞聖人の教えを間違って理解しているとか。

親鸞会の時に犬猫の説法というのがありました。親鸞会をやめる人がいたら、仏法を聞かないのは人間ではない、犬猫と一緒にだといって、だからここで四つん這いになって「ワン」と叫んでからやめていけと。そして「ワンワン」とか言ったらやめられるのです。私の時にはさすがになかったのですけれども、昔はそういうこ

とをやっていたらしいです。

ところが大谷派に来たら、そういう説法をする人が今もいます。仏教を聞かないものは人間ではないと、仏教は人が人になる教えですというでしょう。つまりこれは、仏法を聞いて私は真実を求めている人間の中の人間です、と鼻高々なのです。そしてそうではない、いい加減な人を見下していきます。でもそうならざるを得ない。求めたら求めたでそうなる、求めなかったら求めなかったで邪見だ。どちらに向かつてどちらに歩んでも私は無明であると。仏法が遇わせてくれる私とはここにある無明だ。そういう私しかないのです。

浄土真宗は当然「浄土の真実」が説かれていのですが、私「私の真実」はずっと迷い続けて死んでいく無明の身である、ということだけ。私は実はこの無明の私が法蔵菩薩なのではないかと思うのです。これは私の思いです。經典に明確な根拠があるかと問われれば自信はありません。ただ、阿弥陀如来が「救う存在」であり、私が「救われる存在」という関係性だけだと、そこには「信心」という私の迷いの心の中でしか救いは証せません。超越的な存

在を信じることでしかその救いの根拠は証せない。しかし、阿弥陀如来が法蔵菩薩という、私と同じように迷い、救いを求めて悩んできた「救われるべき存在」になって、初めて「救われないう私」そのものが、救済の証であるという世界が開けるように思うのです。

なぜなら、南無阿弥陀仏という声は、ずっと迷い続けている真つ暗なこの私が、私自身を呼ぶ声だと。これは曾我量深先生が「如来我となりて我を救いたもう」という言葉を残されているのでしよう。これを最初聞いた時に大谷派は何かつこいい言葉を使って煙にまくのが得意だなと思いました。でもずっと勉強したり、いろいろ見たり聞いたり考えたりしていると、そう

としか思えなくなりました。南無阿弥陀仏は「救う存在」から出た言葉ではなく、法蔵が「救われないう私」となって叫ぶ言葉ではないかと。ずっと迷い続けて、少しも真実に染まること

ができない私が叫んでいるのです。その声を聞くのが南無阿弥陀仏ではないでしょうか。仏教の救いとは何かとか、そういうタイトルで話をしろと言われますが、その時の私は最後にこう聞かれるかと思つていつもヒヤヒヤするのは。

「あなたは救われたのですか」と。仏の救いとはこういうものなのですと話すことはできません。もうそれは何千回とやってきましたから。ところがその救いとは何かを語る事ができません。語つたら結局自分の心の迷いの出来事の中に収まってしまふからです。でも如来が呼んでいる私はここにいます。如来を呼んでい

は「如来さまは私に、お前は浄土に生まれて仏になる、としか言われないう」とずっと言い続けていました。私は毎回毎回それを聞き続けました。それで大峯先生に聞いたのです。「如来が私を浄土に生まれさせて、仏にさせるといふことは凡夫にわかることですか」と。そうしたら「私や君にわからなくても如来が知っているのだ、智慧海が知っているのだ」と言われました。その思い出をずっと抱えて、先生、まだ私にはわかりませんと思ひ続けて生きています。

(了)



ご結婚された方への 記念品としていかがですか？

おしあわせに



かめじゅうよく



※教務所に実際にお渡しする記念品がございます。実際に手に取って見ていただくことができます。

本山「東本願寺」よりお贈りしている結婚記念念珠です。
所属寺（お手次）住職の申請によりお渡しすることができます。
親玉に「東本願寺」の紋の1つである五環紋があらわれています。
ご結婚を祝うプレゼントに最適ですので、ぜひご活用ください。

他にもご結婚された方へ贈る書籍として
『えにしをことほぐ』（東本願寺出版）がございます。
お祝いのメッセージも書き込めます。併せて贈りませんか？

申請書への記入事項

・住職の印 ・新郎新婦の名前 ・挙式予定日 ※冥加金は必要ありません。

お問い合わせは高岡教務所まで
電話番号0766-22-0464



編集委員

黒川 一紀(第3組隨順寺)
 今川 信悟(第3組正立寺)
 北條 康恵(第4組光證寺)
 梨谷 真嗣(第6組真行寺)

編集委員募集

ただ今、編集委員を募集しております。
 協力していただける方は教務所(担当 菊池
 までご連絡ください。

【タイトル『我身』について】

「わが身」といいますね、あの「わが身」というものを正しく「わが身」といえるのはですね、やはりこの阿頼耶識ですね。阿頼耶識という——阿頼耶識というものは、このです。ね体ですね、この身というもの——この身というものをですね、それをちゃんと見ていくものですね、公明正大な心をもってわが身というのを見ていくんですよ。わが身を見ていく、と。わが身というのは、つまり阿頼

耶識の世界にあるんでしょう。わが身というものはですね。だから、阿頼耶識というものはわが身とすぐになにか、そこへこう——ね、わが身という「わが身」というのは軽いものだ。そういうて、この——すぐですね、わが身という私の、すぐ私有物のように考える。わたくしの私有物、わが身という私有物、と。ところがこの阿頼耶識でわが身というのはこれ、公明正大な存在であります。

(曾我量深『法蔵菩薩』より)

編集後記

『我身』の第四号をお届けします。「人間にとって宗教とは何か」をテーマとする瓜生崇氏の二回目の講義を掲載いたしました。今号をもって瓜生氏の講義録は最終回となります。

四号全て関わらせていただきまして、今なんとなくやり遂げた感があるのですが、別に『我身』は最終号でも何でもないので、この感慨は一瞬のものであり、またすぐに果てしないテープ起こしと校正の道を進まねばならないのでしよう。

というわけで、これからも仕事の合間を縫って他の編集委員と力を合わせ、充実した内容の冊子を作っていきたいと思えます。音声ファイルから文字を起こしているにもかかわらず、未だに「テープ起こし」という言葉を使い続けることに違和感を覚えます。

(黒川一紀)

発行者

真宗大谷派高岡教区教化委員会

発行所

真宗大谷派 高岡教務所

〒933-0912 高岡市丸の内2-15

TEL 0766-22-0464

FAX 0766-24-2215

E-mail

takaoka@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派(東本願寺)

高岡教区ブログ



<https://takaokakyouku.net>